陶芸の里・小石原皿山の景観表象の把握と評価 —実存的景観論の試み—

山下 三平¹・丸谷 耕太²・内山 忠³・栗田 融⁴

¹正会員 九州産業大学教授 工学部都市基盤デザイン工学科 (〒813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1)

E-mail: samp@ip.kyusasn-u.ac.jp

²非会員 金沢大学助教 人間社会研究域人間科学系 (〒920-1192 金沢市角間町)

E-mail: maruya@staff.kanazawa-u.ac.jp

³正会員 熊本大学特任助教 大学教育機能開発総合研究センター (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-40-1)

E-mail: t-uchi@kumamoto-u.ac.jp

⁴非会員 九州産業大学教授 芸術学部生活環境デザイン学科 (〒813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1)

E-mail: kurita@ip.kyusan-u.ac.jp

文化的景観は生きた景観であり、伝統的な生業・生活の持続によって様相がさまる。これを真に捉えるには、景観において生きる人々の実存に迫る必要がある。本研究は17世紀に始まり、20世紀中期の民芸運動の影響を受けた陶業の産地である、福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区を対象とした。ここで写真投影法を適用し、窯元とその家族の目に映った工芸／焼き物の里の景観表象とその価値を追究した。また里への来訪者の見方も併せて扱い、窯元らと比較した。さらに他地域の農業の文化的景観の研究結果と比較した。その結果、生活基盤要素の無意識化と背景要因の意識化がとくに職人の表象で確認された。また聖性と山水の表象が、生業の違いを超えて景観上、重要であることが示された。さらに薪積みの表象の、新たな景観的価値と来訪者の役割が示唆された。

Key Words: cultural landscape, Photo-Projective Method, pottery, craftsman, tradition, existentialism

1. 序論

(1) 景観の実存的把握

景観とは何か——これを安定した、しかも現実に即したものとして捉えるのは必ずしも容易でない。ときにその捉えどころのなさを、「ランドスケープ (landscape)」というよりも、「ランド“エ”スケープ (land-escape)」ではと、ややシニカルに見なすこともある¹⁾。

景観の捉えどころのなさは、景観が主観性をその構成契機とする、環境と主体との具体的な関係性の表象であることに起因する。これに対して、景観を安定的に把握するために、視点－視点場／主対象－対象場のモデル²⁾、環境イメージ³⁾あるいは眺望－隠れ場理論⁴⁾が用いられる。あるいはコスモロジーや宗教的世界観⁵⁾の普遍性に基づき、あるいは環界 (umwelt)^{6), 7)}やアフォーダンス⁸⁾の概念にみられるような、知覚と行動／主体と客体の相即に基づいて、景観を扱う立場がある⁹⁾。一方、主観性を最小限に

とどめ、エコトープの空間的不均質性が視覚的に明瞭に区別される環境領域として、「客観的」に景観を捉える立場もある¹⁰⁾。

これらに対し、いわゆる文化的景観は、実存的景観把握を基礎とすべきものと考えられる。文化的景観は地域の人々に固有の生活・生業の営みと風土を表象する、生きた景観として捉えることが求められるからである。ここに「実存的景観」というのは、むしろまず景観の捉えどころのなさを重視し、その偶発性・事実を基礎として (即自存在)、そこに「湧出 (surgir)」する本質的な意識形態 (対自存在) という意味^{11), 12)}での景観である^[1]。そのような、生きた、実存的な景観として文化的景観を把握することは、どのような事態・過程を含むであろうか。人々の長年の営みにより、地域には固有の景観が形成されると想定される。それはある程度、形態が安定したものであろうし、移りゆくものであろう。変容しない生きた景観というのは形容矛盾である。

しかし、そのような「動的平衡」¹³⁾の状態と想定

される景観^[2]は、どのようにして把捉すべきだろうか。いうまでもなく、地域の人々の心象の景観として把捉しなければならない。地域の実存にかかわるこのような景観は、地域の人々の風土性(意味・方向性・感覚)¹⁴⁾の表現として把捉されなければならない。このようにして把捉される景観は、景観を物的に創り出すことと等価である¹⁵⁾。なぜならば、それは日常的には地域の人々の心象として、無意識化され自覚されにくいものでありながら、それが意識化され明示されたならば、他地域の人々の思いもよらぬ側面と価値を含んでいるかもしれないからである。したがってこのような景観表象の発見・同定は、まさに、実存的な創造行為にほかならない。

(2) 日本の文化的景観研究への一齣

2004年の文化財保護法改訂・公布以降、文化的景観に関する研究と実務が盛んである。多くは、第一次産業と結びついたものであり、第二次、第三次産業に関連するものは極めて少ない¹⁶⁾⁻¹⁸⁾。研究対象としては、棚田¹⁹⁾⁻²³⁾、段々畑・茶畑・果樹園²⁴⁾⁻²⁸⁾、水路^{20), 22), 29)-33)}、道^{34), 35)}、神社・寺院³⁶⁾⁻³⁸⁾、放牧地^{39), 40)}、屋敷林・海岸林・桜樹林⁴¹⁾⁻⁴³⁾などの個別要素、町並み^{29), 33), 44)-46)}、農山漁村集落^{18), 22), 25)-27), 30), 41), 47)-55)}、里山^{43), 57)}、森林^{34), 58)}、流域⁵⁹⁾などの中・広域空間構造、敷地単位^{16), 22), 51), 56)}の小規模空間構造など多様である。また、景観保全の経済的側面^{36), 45)}や制度面^{19), 21), 28), 32), 44), 57), 60), 61)}など、主として社会科学的観点から景観の形成・維持の側面を扱うものも見られる。しかしこれらにおいては、人々の日常体験・認識としての景観表象が、必ずしもそれとして、直接把捉されているわけではない。

文化的景観の表象として地図や航空写真を用いた研究では、景観の歴史的変遷が明らかにされる^{20), 24), 27), 29)-31), 33), 40), 42), 43), 46)-56), 58)}。しかし現在の地域住民が、日常体験の中でどんな景観要素に接近し、なにに価値を見出しているのかは直接的に明らかでなく、間接的に想定されるに過ぎない。一方、古絵葉書、古写真あるいは古絵図を用いた研究では、失われた景観とその要素が明らかになるが、それらの表象は観光・旅行の案内を目的としたものであり、また現在の日常の景観の表現でもない^{24), 31), 33), 46), 56)}。しかし、現在の景観表象を扱ったものでも、研究調査主体による記録が目的であったり⁵⁴⁾、域外の被験者による視覚心理実験としてであったりする²⁷⁾。そしてこの場合、地域の人々の日常体験・認識としての景観表象は、それらの記録・実験の結果から間接的に推定されるに過ぎない。その

ような、住民の日常の景観表象を直接把捉する文化的景観研究は、山林・里山／里地の景観に関する、奥・深町らの一連の研究^{25), 57), 74), 75), 80)}に限られる。彼らは属性の異なる人々に対象地の景観の撮影を依頼する手法を適用し、直接的に景観の表象を把捉することを試みた。とくに文献⁵⁷⁾では、古くから農業を営む住民、新住民および域外の訪問者に里山地域の景観の撮影を依頼し、人々と異なる価値意識を明らかにした。

以上のように日本の文化的景観に関する研究は、産業に携わる住民の目をとおした、直接的な文化的景観の表象把捉の研究が極めて少なく、また上述のとおり、第二次産業を対象とした研究が極めて不十分な現状である。この二つの領域に関する研究の蓄積が俟たれる。

ところで北部九州では、とくに17世紀以降、伝統的な第二次産業である窯業が盛んに行われてきた。窯業・作陶に関わる文化的景観には、大分県日田市の小鹿田焼の里のように、「重要文化的景観」として文化財に選定されたものがある^{16), 82)}。小鹿田においては当初の伝統技法とそれを支える資源や道具が、現在まで大きく変容することなく継承されている。その一方、新しい技法や材料・燃料を取り入れつつ、同時に伝統の継承を試みる地域がある。このような地域では、文化的景観の変容の許容が大きな課題であり、受容すべき、あるいは維持すべき表象を同定しその根拠を明らかにする研究が不可欠である^{18), 63)}。

(3) 本研究の目的

以上のように、日本の文化的景観研究においては、1) 第二次産業との関係、ならびに2) 生活・生業を営む人々の実存的景観、を扱った成果が極めて不十分である。

そこで本研究では、伝統的な第二次産業である陶業の産地であり、重要文化的景観・小鹿田焼の里の起源である、福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区を対象とし、まずはじめに、窯元が目・自由な選択をとおして、実存的な文化的景観の表象を直接的に把捉する。そしてつぎに、景観表象に対する窯元の意識を、その属性に基づき探ることで、景観形成の作用面すなわち属性を共有する人々の間の志向性・相互主体性を追究する。これに加えて、里への来訪者の見方を窯元らのそれと比較し、さらに他地域の農業の文化的景観の研究成果と比較して、文化的景観における相互主体性の本質に迫る。本研究では、このように産業従事者の実存を出発点とし、そののちに文化的景観の本質に向かう、実存主義の立場を踏襲

図-1 調査地域・小石原皿山とその周辺. 国土地理院・電子国土 Web をもとに作成

する¹³⁾.

こうして、生きた、実存的景観としての、窯業の里の文化的景観を追究し、その産地を含む、文化的景観地の保全のあり方を究明することを、研究の目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

対象地域は福岡県朝倉郡東峰村（人口：2,174 人面積：51.9 km²）の小石原皿山地区である（図-1）。この地区は 17 世紀後半に確立された小石原焼の中心地区である。ここは重要文化的景観である小鹿田焼の里の起源であるが、小鹿田焼と異なり、近代化を比較的大きく受容しながら伝統技法の継承を模索している⁶²⁾。その意味で、重要文化的景観である小鹿田焼の里とは好対照である。これまでほとんど取り上げられていない、伝統的な二次産業の文化的景観と近代化の影響を探る重要な視点が得られるものと考えられる。

地区内を大肥川が流れ、かつてはここに、20 基ほ

どの唐臼（陶土精製装置）が並び、独特の景観を構成していた。また水簸（すいひ）のためのフネやオロ、登り窯と燃料の薪積みも特徴的な景観要素であった（図-2）^{18), 62)}。いまま皿山地区の入り口には、修験道の役行者に所縁の「行者杉」の林が聳え、ここに幽玄の趣を加味している（図-3）。

小石原焼は、20 世紀初頭の民芸運動の広がりとともに、1950 年代以降、当初の 9 軒から窯元数が急速に増え、2015 年現在、44 軒が陶器協同組合に加盟している。この間に皿山地区から国道（211, 500 号線）に沿って窯元の立地が拡大した。また生産の拡大に伴って、燃料と材料を地域外から取り入れるようになった。機械化により蹴轆轤（けろくろ）は使われなくなり、陶土精製の唐臼は姿を消した。窯の主流も登り窯から石炭窯、ガス窯に変化した。こうして小石原の景観は変容して行った¹⁸⁾。

なお、小石原から分かれて日田で開窯した小鹿田焼の里は、当初の 10 軒で現在に至り、技法、燃料および材料が固く守られている。唐臼、水簸、蹴轆轤および登り窯が変わらず使われており、2008 年に重要文化的景観に選定された^{16), 82)}。しかしこれはむしろ、北部九州の窯業の里としては特殊であり、多くは小石原のように、伝統と近代化の狭間にある。

(2) 調査方法

調査は写真投影法⁶⁴⁾により行った。この方法は 1980 年代後半に、比較文化精神医学の野田正彰により紹介され、環界（umwelt）の投影的分析法として広く知られ、用いられるようになった。被験者に生活世界の写真を撮らせ、それを読み解くことにより、被験者のおかれている生活世界と、その映像・表象に投影される被験者の心的世界を、同時に分析することができる。したがって、文化的景観の形成・維

図-2 作陶の工程と自然資源利用. 左：伝統的、右：現代的

図-3 「行者杉」の木々の様子

表-1 窯元／家族回答者の属性：性別・世代・居住開始年代・出身地（不明1人は除く）

性別(人)		出身地(人)			
男	女	小石原	小石原外		
9	16	14	11		
年代(人)					
10代	20代	30代	40代	50代以上	
3	2	4	7	9	
居住開始年代(人)					
1950年代以前	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代以後
3	2	2	8	6	4

表-2 来訪回答者の属性：性別・年代・訪問回数

性別(人)		来訪回数(人)	
男	女	初めて	2回以上
5	5	4	6
年代(人)			
50代	60代	70代	80代
1	6	2	1

持に関わる生活・生業を営む人々に、写真投影法を適用すれば、その表象を、自由な選択による実存的

景観のそれとして、直接的に把握することが可能になる。また、彼らの属性により規定される生活世界の異同に基づいて、相互主体的な景観表象を明らかにすることができる。

なお、写真投影法は、景観認識における調査主体の主観をできるだけ排して、被験者の見方を直接把握する手法として河川環境^{65)~70)}、都市空間・公園^{71)~74)}、森林・草地^{75)~78)}、農村地域^{79), 80)}など、様々な対象・地域で適用されている。本来「(写真)投影法((Photo-) Projective Method)」として、被験者の属性を重視すべきであるが、必ずしもそのような配慮をせず、訪問者を主たる被験者とするケースも多い。この場合、写真にどんな経験が投影されているのかが必ずしも明確でなくなる。それらはむしろChenoweth のいわゆる“Visitor-Employed Photography”に分類すべきであろう⁸¹⁾。

本研究では皿山地区の窯元とその家族にデジタルカメラ（FUJIFILM 製, Fine Pix XP 150, 焦点距離（35 mm フィルム換算値）: 28 - 140 mm）を1週間ほど貸し出し、生活世界の撮影を依頼した。また記録用紙も配布して、撮影ごとに撮影対象とその意図・評価を自由記述で記録してもらった。その時の教示は以下のとおりである。

「50枚を目安に、小石原皿山（とその周辺）らしい風景・景観の写真を撮ってください。お宅の敷地内でもかまいません。その都度、なにを撮影し、どのように思った（っている）かを用紙に書いて、風景・景観への思いを記録してください。好き嫌い、良い悪いなどなんでもけっこうです」

表-3 主対象とその包括分類

窯元/家族							
包括分類	移動・誘導(276)	自然(188)	作陶(126)	共有の場所(112)	居住(69)	聖性(83)	人間(4)
主対象	道(150)	花(47)	焼き物(31)	場所・皿山(35)	家屋(60)	宗教設備(82)	人間(4)
	サイン(101)	木(36)	唐臼(28)	伝統産業会館(15)	ゴミ(9)	茶室(1)	
	装飾(25)	川(26)	作業様相(25)	遊具(14)			
		林(26)	登り窯(16)	小石原工芸館(14)			
		動物(20)	えんとつ(13)	ギャラリー小石原(11)			
		山(13)	薪(9)	広場(9)			
		空(7)	長石(2)	休憩所(8)			
		草(5)	粘土(1)	遺跡(3)			
		池(4)	ガス窯(1)	皿山公民館(2)			
		沼(3)		道の駅(1)			
		畑(1)					
来訪者							
包括分類	移動・誘導(74)	自然(62)	作陶(141)	共有の場所(66)	居住(52)	聖性(9)	人間(0)
主対象	装飾(29)	花(17)	焼き物(74)	場所・皿山(45)	家屋(49)	宗教設備(6)	
	サイン(24)	木(10)	薪(18)	小石原工芸館(12)	コンクリの塊(2)*	石碑(3)*	
	道(18)	川(8)	唐臼(17)	伝統産業会館(8)	庭(1)*		
	カーブミラー(3)*	山(7)	登り窯(16)	遊具(1)			
		空(6)	作業様相(11)				
		草(6)	えんとつ(3)				
		林(5)	粘土(1)				
		畑(3)	ガス窯(1)				

カッコ内は撮影件数。*は来訪者のみ

表-4 属性ごとの撮影数の平均とその差のt検定

性別	被験者(人)	撮影(件)	平均(件/人)	有意確率*
男	9	262	29.1	0.557
女	16	544	34.0	
世代				
30代以下	9	332	36.9	0.380
40代以上	16	474	29.6	
居住開始年代				
1990年代以降	10	297	29.7	0.604
1980年代以前	15	509	33.9	
出身地				
小石原	14	465	33.2	0.784
小石原以外	11	341	31.0	
欠損値	1	52	52.0	
合計(欠損値除く)	25	806	32.2	
合計	26	858	33.0	

*は平均値の差のt検定の結果。

表-5 属性(人数)と独立性の χ^2 検定(上段:被験者数, 中段:列ごとの%, 下段:行ごとの%。白ヌキは6割以上)

		出身地 ^a		世代 ^b	
		小石原	小石原以外	30歳代以下	40歳代以上
性別 ^a	男	8人 57.1% 88.9%	1人 9.1% 11.1%	4人 44.4% 44.4%	5人 31.3% 55.6%
	女	6人 42.9% 37.5%	10人 90.9% 62.5%	5人 55.6% 31.3%	11人 68.8% 68.8%
	世代 ^b	30歳代以下 8人 57.1% 88.9%	40歳代以上 1人 9.1% 11.1%	aとc, bとcはともに $\chi^2=6.173$, $p=0.013$, aとbは $\chi^2=0.509$, $p=0.671$	
		40歳代以上 6人 42.9% 37.5%	30歳代以下 10人 90.9% 62.5%		

表-6 属性(撮影数)と独立性の χ^2 検定(上段:列ごとの%, 下段:行ごとの%。白ヌキは6割以上)

		世代		居住開始年代		出身地	
		30歳代以下	40歳代以上	1990年代以降	1980年代以前	小石原	小石原以外
性別	男	50.0% 63.4%	20.3% 36.6%	24.9% 28.2%	36.9% 71.8%	53.5% 95.0%	3.8% 5.0%
	女	50.0% 30.5%	79.7% 69.5%	75.1% 41.0%	63.1% 59.0%	46.5% 39.7%	96.2% 60.3%
	世代	30歳代以下 49.2% 44.0%	40歳代以上 36.5% 56.0%	1990年代以降 50.8% 31.9%	1980年代以前 63.5% 68.1%	30歳代以下 68.6% 96.1%	40歳代以上 3.8% 3.9%
						小石原	小石原以外
						30歳代以下 31.4% 30.8%	40歳代以上 96.2% 69.2%
						1990年代以降 28.6% 44.8%	1980年代以前 48.1% 55.2%
						71.4% 65.2%	51.9% 34.8%

調査期間は2013年3月4-11日であった。皿山に位置する全15軒の窯元とその家族30名に依頼して、26名から有効な回答を得ることができた。得られた映像は858件、平均で33.0件であった。回答者の属性の構成は表-1のとおりである。

また、皿山への来訪者の見方を参照するために、2013年7月13日に、福岡市からの2台のバスによるツアーの団体日帰り客約80名の中から、調査協力の諒解が得られた男女それぞれ5名ずつの計10名

に対し、同様の方法で、対象地域の撮影・記録を依頼した。得られた映像は597件(平均59.7件)であった。来訪回答者の属性の構成を表-2に示す。

(3) 分析方法

得られた映像と回答者の記録に基づいて、まず、窯元／家族による撮影対象を38種の主対象に分類した。これらの分類には3名の分析者がそれぞれ当り、その後、合議により最終分類を決定した。その上でさらに、7種類の主対象に包括分類し、階層的な分析に供した(表-3)。

回答者の記録は評価という観点から、「肯定的」、「否定的」および「評価なし」に3分類した。一映像に対して肯定と否定の両評価の記録がある場合は、二分して肯定的、否定的のそれぞれに加算した。評価の分類も、主対象の分類と同じ手順を踏襲した。

来訪者の映像と回答者の記録も、同じ手順で整理した。その主対象には窯元／家族による38種のカテゴリに収まらないものも4種あり別途集計した。包括分類では、それら4種は窯元／家族らの7種のカテゴリのいずれかに分類された(表-3)。

写真投影法では被験者の属性を重視するため、本論文ではまずその吟味を行ったうえで、1) 主対象、2) 評価、3) 主対象と属性、4) 評価と属性、および5) 主対象と評価との関係を検討する。分析にはSPSS statistics 17.0を用いる。分析の統計的な指標として、撮影数の比率と一人当たりの平均値を用いる。

なお、ツアー客の選定方法は上述のとおりであり、分析から小石原皿山の訪問客一般を議論することは差し控えるべきである。しかしながら、小石原皿山住民との比較により、その特徴の把握には、一定の効果を発揮するものと期待される。

3. 属性

(1) 被験者と撮影

小石原皿山の人々にとって、柳宗悦や、後に彼と袂を分かつことになった三宅忠一らによる民芸運動が画期的であった。この運動により小石原焼の窯元は急増し、販売が拡大し、その後の経済活動に敏感になった^{18), 63)}。これを踏まえ、世代を民芸運動のピーク時と高度経済成長期の末期である1970年代末を目安として、「30歳代以下」と「40歳代以上」に、居住開始年代をバブル経済の崩壊時期である1991年を目安に、「1990年代以降」と「1980年代以前」にそれぞれのカテゴリを二分する。

平均の撮影数は1人あたり33.0件(858件/26

表-7 窯元／家族と来訪者による、主対象とその包括分類ごとの撮影数の比率の比較。白ヌキは5%水準で有意な差があり、かつ比率が相対的に高いもの

包括分類	主対象	窯元/家族	来訪者	Z	有意確率
移動・誘導	道	32.2%	18.3%	5.13	0.0%
	サイン	17.5%	4.5%	6.36	0.0%
	サイン	11.8%	5.9%	3.23	0.1%
	装飾	2.9%	7.2%	3.49	0.1%
自然		21.9%	15.3%	2.73	0.6%
	動物	2.3%	0.0%	3.09	0.2%
作陶		14.7%	34.9%	8.20	0.0%
	焼き物	3.6%	18.3%	8.82	0.0%
	登り窯	1.9%	4.0%	2.21	2.7%
	薪	1.0%	4.5%	3.90	0.0%
共有の場所		13.1%	16.3%	1.56	11.8%
	場所・皿山	4.1%	11.1%	4.80	0.0%
	遊具	1.6%	0.2%	2.12	3.4%
	ギャラリー小石原	1.3%	0.0%	2.29	2.2%
居住		8.0%	12.9%	2.72	0.7%
	家屋	7.0%	12.1%	3.03	0.2%
聖性		9.7%	2.2%	4.75	0.0%
	宗教設備	9.6%	1.5%	5.25	0.0%

*撮影数10件以上を表示

人), 標準偏差は19.4件である。分布は正規分布に従う仮説が棄却されない(K-S検定: $z=0.365$, $p=0.999$)。2項分類された性別, 世代, 居住開始年代および出身地のそれぞれで, 2項分類カテゴリ間の平均撮影数の差を調べると, いずれも有意な差がない(表-4)。

(2) 被験者の連関

被験者の属性間の独立性をピアソンの χ^2 検定で確かめた。その結果, 性別と出身地, および世代と出身地との関係が, 5%水準で独立と言えない(表-5)。しかし, 性別と世代との間の独立性の仮説は棄却できない。なお, 居住開始年代と他の属性との関係も独立仮説を棄却できない。

性別については, 男性は小石原出身者が88.9%に上り, 小石原以外の出身者の90.9%が女性である。一方, 世代については, 30歳代以下の88.9%が小石原出身者であり, 小石原以外の出身者の90.9%が40歳代以上である。以上から, 小石原においては, 他地域から婚期に移住してきた女性が多いことと, 比

較的若い世代の移住が少ないことがわかる。

なお, 以上の両分布が一致するのは偶然である。性別と世代にはとくに有意な差はみられず, 男性は30歳代以下が4名で, 40歳代以上が5名であり, 女性は30歳代以下が5名で, 40歳代以上が11名である。

(3) 撮影の連関

撮影数を属性間で調べると, 性別, 世代, 居住開始年代および出身地のいずれの間も, 独立とみなすことができない(表-6)。

この分析から撮影数に関しては, 1) 男性に占める小石原出身者, 2) 小石原以外の出身者に占める女性／女性に占める小石原以外の出身者, 3) 若年者(30歳代以下)に占める小石原出身者／小石原出身者に占める若年者, および4) 小石原以外の出身者に占める年長者(40歳代以上)／年長者に占める小石原以外の出身者, の割合が, 被験者の人数の連関(表-5)を反映して多く, いずれも6割を上回る。

また撮影数では, 5) 男性に占める若年者, 6) 年長者に占める女性／女性に占める年長者, 7) 男性に占める旧来(1980年代以前)の住民(女性は旧来／新来に関わらず), 8) 旧来の住民に占める年長者／年長者に占める旧来の住民, および9) 旧来の住民に占める小石原出身者／小石原出身者に占める旧来の住民, の割合が, 被験者の人数による連関のなさにも関わらず多く, いずれも6割を超える。これらは被験者数の分布に明瞭に表れない, 各属性による撮影傾向の表れの一端である。

以上をまとめれば, 男性で, 比較的若い世代または古くから小石原皿山に住んでいる人々は, 特徴的に撮影数が多い。また古くから小石原皿山に住んでいて, 比較的年長または小石原出身の人たちにも, 撮影数が多い傾向が見られる。

図-4 窯元／家族と来訪者の主対象 (a) とその包括分類 (b) の撮影数の平均値の比較。主対象は, 両被験者グループの撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示(表-7に対応)。*は平均値でも5%水準で有意な差が見られるもの

図-5 窯元／家族 (a), b), f) と来訪者 (c), d), e) による主対象とその包括分類の例

4. 主対象・評価・属性

(1) 主対象

窯元とその家族の、38種類の主対象の分類を、さらに【移動・誘導 (276件)】【自然 (188件)】【作陶 (126件)】【共有の場所 (112件)】【居住 (69件)】【聖性 (83件)】および【人間 (4件)】に、包括分類できる (表-3)。

窯元とその家族の撮影では、人の【移動・誘導】に含まれる、「道 (150件)」を主対象とした映像が最も多く、次が道案内・看板等を含む「サイン (101件)」であり、極めて関心が高いことがわかる。これらに対して焼き物の里の特徴的な景観要素であり、【作陶】のカテゴリに含まれる、「焼き物 (31件)」「唐臼 (28件)」「登り窯 (16件)」「えんとつ (13件)」「薪 (9件)」等を主対象とする映像は比較的少ない。窯業の里の景観を成り立たせる働き・作業を示す「作業様相 (25件)」も同様である。

火災防止を祈願する祠や、役行者に所縁の修験道に関わる事物を含み、【聖性】を表す「宗教設備 (82件)」は3番目に多く、【居住】を代表し4番目の主対象である窯元の「家屋 (60件)」より多い。小石原皿

山ののびとにとって、宗教設備／聖性が、家屋／居住に勝るとも劣らず重要であることがわかる。

【自然】のカテゴリに含まれる、「花 (47件)」「木〔孤立樹〕 (36件)」「川 (26件)」「林 (26件)」「動物 (20件)」「山 (13件)」「空 (7件)」「草 (5件)」「池 (4件)」「沼 (3件)」および「畑 (1件)」の総数 (188件) は【移動・誘導】に次ぐ。自然への関心の高さも現れている。

皿山の【共有の場所】としての、場の景観を表す「場所・皿山 (35件)」の撮影が7番目である。また、個別の【共有の場所】であり、拠点である「伝統産業会館 (15件)」「小石原工芸館 (14件)」「ギャラリー小石原 (11件)」等が主対象としてそれなりの数で取り上げられている。共有の場所・拠点に対する関心の表れである。ただし、国道211号線沿いの「道の駅 (1件)」は例外的で、皿山との物理的・心理的な距離が読み取れる (図-1)。また、「皿山公民館 (2件)」の存在感が、伝統産業会館に隣接するためか、薄い。

なお、【人間】の撮影は4件であり、極めて少ない。一方、来訪者による撮影は、包括分類で見ると、【作陶 (141件)】【移動・誘導 (74件)】【共有の場所 (66件)】【自然 (62件)】【居住 (52件)】および【聖

図-6 窯元／家族と来訪者の評価の比較. 両被験者グループの肯定的評価の比率に有意な差が見られない ($z=1.56$, p (有意確率) = 11.8%)

性 (9 件)】の順である (表-3. 【人間】は 0 件). また主対象としては「焼き物 (74 件)」「家屋 (49 件)」「場所・皿山 (45 件)」「装飾 (29 件)」「サイン (24 件)」の順に多い. まずは訪問目的である焼き物が一番多く, 次いでそれを取り巻く環境に注目が移る様子が垣間見える.

ここでさらに窯元／家族と来訪者の比較を進めたい. 表-7 は両被験者グループの, 主対象とその包括分類に属する撮影の比率の差を検定したものである. これによれば, 【移動・誘導 (32.2%)】とこれに属する「道 (17.5%)」と「サイン (11.8%)」は窯元／家族の撮影, 「装飾 (7.2%)」は来訪者の撮影が有意に多い. また【共有の場所 (16.3%)】自体は両被験者グループに有意な差が見られないが, 「場所・皿山 (11.1%)」が来訪者に, 「遊具 (1.6%)」と「ギャラリー小石原 (1.3%)」が窯元／家族に有意に多く撮影されている.

【自然 (21.9%)】とこれに含まれる「動物 (2.3%)」, ならびに【聖性 (9.7%)】とこれに含まれる「宗教設備 (9.6%)」は窯元／家族で, 【作陶 (34.9%)】とこれに属する「焼き物 (18.3%)」「登り窯 (4.0%)」および「薪 (4.5%)」と, 【居住 (12.9%)】とこれに属する「家屋 (12.1%)」は, 来訪者の撮影が有意に多い.

図-4 (a) は主対象の 38 分類に対する平均撮影数を比較したものである. 両被験者グループ間の平均値の傾向は, 表-7 と同様である. とくに【移動・誘導】に属する「道 (5.77 件)」と【聖性】を表す「宗教設備 (3.15 件)」で窯元／家族の平均値が高く (道: $t=2.435$, $p=0.020$; 宗教設備: $t=2.784$, $p=0.010$), 【作陶】に属する「焼き物 (7.40 件)」と, 【居住】に属する「家屋 (4.90 件)」で来訪者が高い (焼き物: $t=-3.054$, $p=0.012$; 家屋: $t=-2.030$, $p=0.050$).

図-4 (b) は包括分類について, 両被験者の平均撮影数の比較をしたものである. 【誘導・移動 (10.62 件)】【自然 (7.23 件)】および【聖性 (3.19 件)】で窯元／家族の平均値が高く, 【作陶 (14.10 件)】【共有の場所 (6.60 件)】および【居住 (5.20 件)】で来

訪者の平均値が高い. とくに来訪者が高い【作陶】と, 窯元／家族が高い【聖性】は, 両被験者グループ間の平均値の差が有意である (作陶: $t=-2.312$, $p=0.042$; 聖性: $t=2.396$, $p=0.023$).

なお, 【共有の場所】は撮影比率 (表-7) ではとくに「場所・皿山」が来訪者に有意に多く撮影されているが, 平均値では 5% 水準で有意ではない. 平均値では「ギャラリー小石原 (0.42 件)」だけが窯元／家族に有意に多いものの ($t=2.668$, $p=0.013$), 上記のとおり, 【共有の場所】は来訪者の特徴である.

総括すれば, 【移動・誘導】【自然】および【聖性】で窯元とその家族, 【作陶】【共有の場所】および【居住】で来訪者, による撮影が多い傾向にあり, 両者の視点の違いが表れている (図-5).

(2) 評価

窯元とその家族では, 肯定的評価が 43.8% に上り, 否定的評価の 13.2% を大きく上回る (図-6). また, 評価なしが 43.1% あり, 必ずしも峻厳な評価を, 地域の景観に下さない傾向もみられる. 来訪者においても, 肯定的評価が 39.1% であり, 否定的評価の 4.5% を, 同じく大きく上回る. また評価なしは 56.4% であり過半数に上る. 住民と来訪者の肯定的評価の比率の差を検定すると, 5% 水準で有意な差が見られない ($z=1.56$, $p=11.8\%$).

(3) 主対象と属性

以下では便宜的に, 10 件以上の撮影があった主対象を扱い, それらと属性との関係を分析する.

a) 性別

窯元とその家族の, 男性の撮影比率である 32.5% を母比率として, 各主対象の選択に男性の撮影が占める比率を検定すると, 「焼き物 (60.0%)」「小石原工芸館 (57.1%)」および「宗教設備 (45.6%)」が, とくに男性によって有意に多く選択されたことがわかる (表-8). 一方, 「動物 (5.0%)」および「作業様相 (0.0%)」は, むしろ男性による選択が有意に少ない. また, 包括分類で見ると, 【聖性 (45.6%)】 (= 「宗教設備」) だけが有意であり, 男性による選択の割合が多い (表-8).

撮影数の平均値を男女で比較すると, 5% 水準で有意な差はないが, 上記と同様に, 「焼き物 (1.33 件対 0.50 件)」「小石原工芸館 (0.89 件対 0.38 件)」および「宗教設備 (4.00 件対 2.69 件)」で男性の平均撮影数が多く, 「動物 (0.11 件対 1.19 件)」と「作業様相 (0.00 件対 1.06 件)」で女性のほうが多い傾向が見られる (図-7).

包括分類でも平均撮影数に男女間で有意な差は見

表-8 窯元／家族の主対象とその包括分類の、男性による撮影数の比率とその検定. 主対象は有意差のあるもののみ表示. 黒色白ヌキは比率が高く、灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	男性の撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	—	29.9%	0.92	35.8%
自然	動物	31.8%	0.19	84.6%
作陶	焼き物	25.2%	1.57	11.6%
	作業様相	60.0%	2.63	0.9%
共有の場所	小石原工芸館	0.0%	2.86	0.4%
居住	—	31.5%	0.23	82.0%
聖性	宗教設備	57.1%	1.97	4.9%
	—	43.1%	1.82	6.9%
	—	45.6%	2.48	1.3%
	—	45.6%	2.48	1.3%

* 全体:32.5%. 撮影数10件以上を表示

図-7 窯元／家族の主対象 (a) とその包括分類 (b) の、撮影数の平均値の男女比較. 主対象は、男性による撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示 (表-8に対応)

表-9 窯元／家族の主対象とその包括分類の、30歳代以下の住民による撮影数の比率とその検定. 主対象は有意差のあるもののみ表示. 黒色白ヌキは比率が高く、灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	30歳代以下の撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	—	41.7%	0.17	86.6%
	装飾	72.0%	3.13	0.2%
自然	木	33.5%	2.07	3.9%
	動物	22.9%	2.20	2.8%
作陶	焼き物	15.0%	2.38	1.7%
	作業様相	51.5%	2.12	3.4%
共有の場所	遊具	17.6%	3.07	0.2%
居住	—	45.4%	0.88	37.8%
聖性	宗教設備	84.6%	3.18	0.2%
	—	49.2%	1.32	18.8%
	—	29.1%	2.18	2.9%
	—	29.1%	2.18	2.9%

* 全体:41.2%. 撮影数10件以上を表示

図-8 窯元／家族の主対象 (a) とその包括分類 (b) の、撮影数の平均値の世代間比較. 主対象は、30歳代以下による撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示 (表-9に対応)

られないが、【聖性】は男性で4.00件、女性で2.69件と、男性に多く撮影される傾向が確認される(「宗教設備」と同数). また【聖性】と【居住】以外は、いずれも女性が男性を平均撮影数で上回る(図-7).

b) 世代

窯元とその家族の30歳代以下の撮影比率である41.2%を母比率とすると、「装飾(72.0%)」「焼き物(75.0%)」および「遊具(84.6%)」が、比較的若い世代である30歳代以下で、有意に多く選択されていることがわかる(表-9). 一方、「木(22.9%)」「動物(15.0%)」「作業様相(17.6%)」および「宗教設備(29.1%)」は、若い世代による選択が有意に少ない. 包括分類では、若い世代の選択が【自然(33.5%)】と【聖性(29.1%)】(=「宗教設備」)で有意に少なく、【作陶(51.5%)】で有意に多い(表-9).

撮影数の平均値を世代間で比較すると、5%水準で有意ではないが、同じく、「装飾(2.00件対0.44件)」「焼き物(1.67件対0.31件)」および「遊具(1.22件対0.13件)」は若年層の撮影数が多く、「木(0.89件対0.33件)」「動物(0.33件対1.06件)」「作業様相(0.33件対0.88件)」および「宗教設備(2.56件対3.50件)」は、年長の層の撮影数が多い(図-8).

包括分類でも平均値では有意な差が見られないが、【移動・誘導】【作陶】【共有の場所】および【居住】で若年層、【自然】と【聖性】で年長の層の撮影数が多い傾向が見られる(図-8).

以上のように、若い世代は即物的な表象への注目度が高く、年長の世代は焼き物の成り立ち・背景要因への関心が、相対的に高いことがわかる.

c) 居住開始年代

窯元とその家族の居住開始時期が1990年代以降の撮影比率である36.8%を母比率とする. 「装飾(68.0%)」「花(53.7%)」「川(56.0%)」「焼き物(60.0%)」および「場所・皿山(58.8%)」が、比較的最近になって居住し始めた住民によって、有意に多く選ばれている(表-10). 一方、「サイン(20.4%)」「作業様相(5.9%)」および「宗教設備(24.1%)」は、最近の窯元とその家族には選ばれにくい. 包括分類によると、新しい居住者は【聖性(24.1%)】(=「宗教設備」)を選ばない傾向を示す(表-10). 撮影数の平均値を居住年代の新旧で比較すると、「装飾(1.70件対0.53件)」「花(2.20件対1.27件)」「川(1.40件対0.73件)」「焼き物(1.20件対0.53件)」および「場所・皿山(2.00件対0.93件)」は新住民、「サイン(2.00件対5.20件, $P=0.049$)」「作業様相(0.10件対1.07件)」および「宗教設備(1.90件対4.00件)」は旧来の住民の撮影が多い傾向がある(図-9). 包括分類の平均値の比較では、とくに【移動・誘導】と

表-10 窯元／家族の主対象とその包括分類の，1990年代以降の住民による撮影数の比率とその検定．主対象は有意差のあるもののみ表示．黒色白ヌキは比率が高く，灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	1990年代以降の 撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	サイン	33.9%	0.99	32.3%
	装飾	20.4%	3.37	0.1%
		68.0%	3.23	0.1%
自然	花	41.5%	1.27	20.3%
	川	53.7%	2.23	2.6%
		56.0%	1.99	4.7%
作陶	焼き物	39.8%	0.62	53.4%
	作業様相	60.0%	2.15	3.2%
		5.9%	2.65	0.8%
共有の場所	場所・皿山	45.4%	1.84	6.6%
		58.8%	2.66	0.8%
居住	-	30.8%	1.02	31.0%
聖性		24.1%	2.36	1.8%
	宗教設備	24.1%	2.36	1.8%

* 全体:36.8%. 撮影数10件以上を表示

図-9 窯元／家族の主対象 (a) とその包括分類 (b) の，撮影数の平均値の居住開始年代間比較．主対象は，1990年代以降の住民による撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示 (表-10 に対応)．「サイン」は平均値でも5%水準で有意

表-11 窯元／家族の主対象とその包括分類の，小石原出身者による撮影数の比率とその検定．主対象は有意差のあるもののみ表示．黒色白ヌキは比率が高く，灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	小石原出身者の 撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	-	60.5%	0.94	34.7%
		58.5%	0.22	82.4%
自然	林	80.0%	2.26	2.4%
		50.5%	1.48	13.9%
作陶	作業様相	17.6%	3.34	0.1%
		57.4%	0.06	95.2%
共有の場所	遊具	84.6%	1.96	4.9%
		55.4%	0.38	70.7%
居住	-	57.0%	0.13	89.6%

* 全体:57.7%. 撮影数10件以上を表示

【聖性】について，旧住民の撮影数が平均で2件以上多く，旧来の住民により選択されやすい傾向が見られる (図-9)．

以上から，比較的最近，皿山に居住をし始めた窯元とその家族の場合，古くからの窯元／家族に比べ，焼き物や，焼き物を利用した装飾物が選ばれやすいことがわかる．また，花や川などの，地域の景観を彩りまた構成する要素への注目と，地域景観の一体性への意識が新住民に，より強く表れている．

その一方で，比較的古くからの住民は，宗教設備や作業様相などの，陶芸の里の景観の形成・維持の

図-10 窯元／家族の主対象 (a) とその包括分類 (b) の，撮影数の平均値の出身地間比較．主対象は，小石原出身者による撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示 (表-11 に対応)

表-12 窯元／家族の属性ごとの撮影数の比率とその検定．白ヌキは有意に比率が高い

属性	肯定的評価の比率	Z	有意確率
性別	男 31.1% 女 54.0%	6.11	0.0%
年代	30歳代以下 48.6% 40歳代以上 45.1%	0.98	32.7%
居住開始年代	1990年代以降 60.4% 1980年代以前 38.5%	6.02	0.0%
出身地	小石原 43.4% 小石原以外 50.9%	2.09	3.7%

背景に注目するとともに，サインによる，人の移動・誘導を重視する傾向があることがわかる．

d) 出身地

小石原出身者の撮影比率は57.7%である．「林 (80.0%)」および「遊具 (84.6%)」は，小石原出身者に有意に多く選ばれ，「作業様相 (17.6%)」は選ばれにくい (表-11)．「林」はおもに役行者・修験道に関わる行者杉の林のことである (図-3)．小石原出身者において，とくに重要な景観表象であることがわかる．包括分類では有意な差は検出されない．撮影数の平均値を出身地間で比較すると，「林 (1.43 件対 0.45 件)」と「遊具 (0.79 件対 0.18 件)」で小石原出身者，「作業様相 (0.21 件対 1.27 件)」で小石原以外の出身者に，撮影が多い傾向が見られる (図-10)．

遊具は伝統産業会館前に設置されたものである．作業様相は小石原出身の人々にとっては，生まれた時からの日常の景観の様相であり，意識されにくいことがわかる．

(4) 評価と属性

窯元とその家族の肯定的な評価の比率は，男性で31.1%，女性では54.0%である．女性のほうが肯定的であり，この差は有意である (表-12)．

窯元とその家族の，30歳代以下と40歳代以上の評価には，有意な差は見られない．一方，居住開始年代については，1990年代以降の比較的最近の居住者の評価は，肯定的が60.4%であるのに対し，1980年代以前の比較的古くからの住民は，肯定的が38.5%であり，両者の比率に有意な差が見られる (表-12)．新しい住民のほうが肯定的な傾向があることがわかる．

表-13 窯元／家族の主対象とその包括分類の、肯定的評価のある撮影数の比率とその検定。主対象は有意差のあるもののみ表示。黒色白ヌキは比率が高く、灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	肯定的評価の撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	道	46.7%	1.00	31.9%
	サイン	55.3%	2.86	0.4%
	装飾	25.7%	3.65	0.0%
	装飾	80.0%	3.65	0.0%
自然	花	44.7%	0.25	80.0%
	川	68.1%	3.36	0.1%
	川	21.2%	2.32	2.0%
	動物	5.0%	3.49	0.1%
作陶	焼き物	38.1%	1.28	20.0%
	唐臼	19.4%	2.74	0.6%
	唐臼	67.9%	2.57	1.0%
	作業様相	12.0%	3.20	0.1%
	えんとつ	84.6%	2.97	0.3%
共有の場所	場所・皿山	50.9%	1.52	12.8%
	場所・皿山	82.9%	4.66	0.0%
居住	小石原工芸館	14.3%	2.22	2.6%
	小石原工芸館	38.4%	0.90	37.0%
聖性	-	33.7%	1.84	6.6%

* 全体:43.8%。撮影数10件以上を表示

図-11 窯元／家族の主対象の評価の比率。肯定的評価のある撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示（表-13に対応）

表-14 来訪者の、肯定的評価のある撮影数の比率とその検定。主対象は有意差のあるもののみ表示。黒色白ヌキは比率が高く、灰色白ヌキは低い

包括分類	主対象	肯定的評価の撮影数の比率*	Z	有意確率
移動・誘導	-	27.0%	2.13	3.3%
自然	-	33.9%	0.85	39.8%
	-	52.1%	3.17	0.2%
作陶	焼き物	54.1%	2.63	0.8%
	薪	66.7%	2.40	1.7%
	唐臼	64.7%	2.16	3.1%
	唐臼	64.7%	2.16	3.1%
共有の場所	-	28.0%	1.84	6.5%
居住	-	44.2%	0.76	44.9%

* 全体:39.1%。撮影数10件以上を表示

小石原出身の窯元とその家族の評価は、肯定的なものが43.4%であり、小石原以外の出身地からの住民の肯定的評価である50.9%より低く、有意な差がある（表-12）。域外出身者は、地元出身者より肯定的な評価をすることがわかる。

図-12 来訪者の主対象 (a) とその包括分類 (b) の評価の比率。肯定的評価のある撮影数の比率に有意差のあるもののみ表示（表-14に対応）

(5) 主対象と評価

窯元とその家族の肯定的評価の比率は全体として43.8%である。これをもとに各主対象の肯定的評価の比率を調べると、「道（55.3%）」「装飾（80.0%）」「花（68.1%）」「唐臼（67.9%）」「えんとつ（84.6%）」および「場所・皿山（82.9%）」で、肯定的評価が有意に多い（表-13）。一方、「サイン（25.7%）」「川（21.2%）」「動物（5.0%）」「焼き物（19.4%）」「作業様相（12.0%）」および「小石原工芸館（14.3%）」で、肯定的評価が有意に少ない（表-13）。

【移動・誘導】に含まれる「サイン」は否定的評価も22.8%に上り、同じ誘導的施設表象である「道」や「装飾」と顕著に異なる（図-11）。焼き物の里に特徴的な要素である、【作陶】の表象として「唐臼」と「えんとつ」、そして里全体の場所の評価が与えられる、【共有の場所】の表象である「場所・皿山」が、より肯定的であるのに、「焼き物」「作業様相」および「小石原工芸館」はそうではない。「焼き物」と「作業様相」はそれぞれ否定的評価が0件と1件であり、評価なしがそれぞれ80.6%と84.0%に上る。陶芸に本質的なこれらの対象は、容易な評価を許さない傾向をもつ。これらに対し、「小石原工芸館」は否定的評価が57.1%である。かつての民芸運動の地域拠点の現状に対する、改善要請の意識が表れている。

【自然】に含まれる「川」と「動物」の否定的評価はそれぞれ30.8%と65.0%でもある（図-11）。なお、「山」の肯定的評価は30.8%である。陶芸の里の骨格である山川の現状に、課題があることがわかる。

一方、来訪者については、全体の肯定的評価の比率は、39.1%である。「焼き物（54.1%）」「薪（66.7%）」および「唐臼（64.7%）」の肯定的評価の高さが際立つ（表-14、図-12）。窯元とその家族と比べると、「薪」への評価が高いことが目立つ。薪積みはかつてのような窯たきの燃料ではなく、暖房用または釉薬のためというのがほとんどである。窯元とその家族には必ずしも意識されやすくない陶芸の

里の特徴ある風情・景物として、来訪者に好意的に注目されている。

なお、包括分類による評価については、窯元／家族では有意な差が見られないが(表-13)、来訪者は【移動・誘導】で肯定評価が相対的に少なく(27.0%),【作陶】で高い(52.1%, 表-14, 図-12)。

5. 考察

(1) 窯元／家族と来訪者の異同

主対象とその包括分類の結果から、移動・誘導、自然および聖性に関しては窯元とその家族による撮影が多い一方、作陶、共有の場所および居住に関しては来訪者による撮影が多く、窯元／家族と来訪者との間に、特徴的な違いが見られる。

小石原焼の里は他の北部九州の窯業地と比べて、現地での店頭販売の割合が高い¹⁸⁾。道、サインおよび店頭を彩る装飾を含む、移動・誘導に関心が高い理由と考えられる(図-13(a))。また、観光資源としての「行者杉」の林や、窯元の奥さんらによる地域活性化のための自主グループ「ラリーグラス(ネパール語でシャクナゲ)」の活動⁸³⁾による植栽などには、自分たちの生活環境の快適さの向上だけでなく、広義の誘導の意味が含まれていると考えられる。陶芸の里の骨格である山川の現状に否定的傾向が見られるのも、戦後の杉の植林により(行者杉ではなく)、山の常緑化による彩のなさや保水能力低下による河川水量の減少が、地元だけでなく、来訪者のためにも課題とみなされているためと考えられる(図-13(b), (c))。一方、作陶、居住やそのための場所は、地元の窯元とその家族には、日常的な生活基盤として——よく指摘されるように⁵⁷⁾——無意識化されているため、来訪者には意識されても、必ずしも地元の人々には被写体として表れ難いものと考えられる。なお、窯元／家族に特徴的である聖性の意義については、項を改めて考えたい。

主対象と評価との関係の分析結果によれば、窯元／家族はサインの現状に否定的であり、域内の道に対する肯定的な見方と対照的である。皿山の人々は、小石原焼の当初の窯元9軒が立地する皿山地区が、民芸ブーム後の窯元増加と国道211号と500号沿いへの進出、道の駅の建設等によって、客足が遠のくことに対する危機感を抱いている¹⁸⁾。サインへの期待が大きいことの表れと考えられる。

作陶の成果である焼き物とその手段である登り窯、煙突、唐臼、薪積み等、および居住を代表する家屋の撮影で来訪者の関心が相対的に高く、窯元／家

族で相対的に低いのは、外部の人々にとっての非日常景観と、内部の人々にとっての日常景観との違いが表れたものと考えられる。また来訪者は窯元とその家族と比べると、薪積みへの注目度と評価が高い。地元の人々にとって日常的で意識されにくいのが、来訪者にとっては印象的な景観表象であり、資源としての活用の可能性が示唆される(図-13(d))。

なお、評価は窯元／家族と来訪者の双方とも、肯定的評価が否定的評価を大きく上回り、両グループに大きな違いはない。地元では人口減少と高齢化、後継ぎ問題等があるにもかかわらず¹⁸⁾、来訪者同様に、肯定評価が否定評価を上回っているのは興味深い。民芸ブームのころに比べ減少したとはいえ、来訪者も春と秋の民陶村まつりの時期には多く、今のところ比較的安定した売り上げを上げていることによるものと思われる。

(2) 主対象と属性

a) 性別

焼き物と小石原工芸館への注目度が、窯元／家族の男性で顕著である。小石原工芸館は、現在使われていないが、1960-70年代の民芸運動の拠点として象徴的な施設であり、大阪の日本工芸館の分館であった(図-14(a))。窯元／家族の男性は、上述のとおり、小石原出身または古くから小石原に住んでいる人たちでありその撮影が多い。窯元は男性である。焼き物と工芸館への注目は、小石原焼と民芸運動との関わりに対する理念的な側面の関心が、男性において比較的明瞭に表れたのかもしれない。

b) 世代と居住開始年代(時間属性)

窯元／家族に見られる、若い世代の即物的な対象への高い注目度と、年長の世代の焼き物の成立／背景要因への関心の相対的な高さは、陶芸の里に対する世代間の認識の違いを表すものであり、里の景観の変容に対する許容度に関わる相違である。文化の継承を重視すべきであれば、年長者が注目する背景要因、とくに宗教設備／聖性に対する配慮が重要となろう。また、比較的最近の皿山居住者は、焼き物や焼き物を利用した装飾物の選択が多い一方、古くからの住民に、宗教設備や作業様相などの、陶芸の里の景観の形成・維持の背景に注目する傾向がみられることに対しても、同様の事態が窺える。撮影数に基づく属性の分析によれば、年長者で古くからの住民の映像が多い傾向にある。伝統的な知見としての、聖性の重要性が際立つ(図-14(b))。

また、旧来の居住者は新居住者よりもサインに注目している。上述のとおり小石原皿山においては、民芸ブーム後の拡大路線の選択により、来訪者に対

図-13 主対象, 評価およびコメントの例 (1)

図-14 主対象, 評価およびコメントの例 (2)

する店頭販売が経営上重要となっている。この結果を含め、来客誘導のあり方についての、世代間の違いを調整することが、課題であることがわかる。

c) 出身地

行者杉の林と遊具は小石原出身者に選ばれやすい。撮影数は、男性であるか、比較的若い人か、あるいは古くから住んでいて小石原出身の人々のものが多い。行者杉の林は小石原皿山の結界ともいえるべき領野であり皿山に古くから居住する人々にとくに重視されても不思議ではない(図-1, 図-14 (c))。反対に、斜面を利用した屋外遊具・長大滑り台は皿山には珍しいため、これで遊んだ体験のある比較的若い層を中心に注目が集まったものと考えられる。

作業様相が小石原出身者に選ばれにくいのは、日常性の無意識化によるものと考えられる⁵⁷⁾。男性は

1名を除きすべて小石原出身者であり、窯元自身の日常の作業は、彼らにとっての景観表象になりにくいものと思われる。産業観光の観点からは、作業様相は特徴ある資源となりうる。その一方でこの結果にみられるように、地元では意識に上りにくい側面をもつ。利用にあたっては、丁寧な交渉が必要な所以である(図-14 (d))。

(3) 評価と属性

窯元/家族と来訪者の双方とも、肯定的評価が否定的評価を上回り、かつ非評価の割合が高い。とくに窯元/家族の女性はより肯定的な評価をする傾向を示す。小石原では、上述の「ラリーグラス」⁸³⁾、飲食店等を含む「七窯土」、福岡市に小石原焼・高取焼のアンテナショップを置く「東峰村ガールズ」⁸⁴⁾な

表-15 松島ら⁵⁷⁾と本研究の成果の、おもな共通点

地元住民	来訪者／新住民
聖性	即物性
生活基盤にアンビバレント背景	伝統／自然表象の新たな価値づけ
伝統水路の改善	外観

どの、女性を中心としたグループによる、この場所をよくする活動が活発である。グループを運営する窯元の奥さんたちは、小石原以外の出身者が多い。内外の目をあわせもち、愛情の中により強い危機感をもって地域を見つめている。その積極性がこの結果に反映しているのではないかと推察される。

窯元／家族の評価に、世代間の違いは見られない一方、居住開始年代が新しいほうが肯定的である。また外部出身者はより肯定的な評価をする。ここにもまた、地域に対する女性たちの積極性が表れているのではないと思われる。

(4) 里山の文化的景観研究との比較

1 (2) で叙述したように、奥・深町らはこれまでに、おもに山林に対する人々の認識や利用の仕方を調べるために、「写真投影法」を適用した一連の研究を発表している^{25), 57), 74), 75), 80)}。その中で里山景観の研究「琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移住住民の景観認識の比較」⁵⁷⁾は、対象地域が農業をおもな生業とする里山地域という点で本研究のそれとは異なるが、手法が近く比較検討の価値が高いと思われる。

松島、奥、深町らのこの論文は、滋賀県大津市八屋戸・守山地区を対象としている。農業をおもな生業とするこの地区には、古くからの約60戸の住民に加え、1970年代以降の宅地開発に伴う入居者の増加により、2004年には267戸826人になった。この地域で旧来の住民(15名)、新住民(16名)および来訪者(大学生42名)を被験者として、写真投影法による景観調査が実施された(2006年)。被験者に与えられた教示は「好ましい景観」または「好ましくない景観」の撮影と、「撮影対象」と「撮影理由」の記録であった。また、できるだけ10枚以上撮影することを求めたが、上限は設けていない(総計1,065件)。

写真投影法の適用については、ここまでのところ本研究とほぼ同様である。大きな違いは撮影のコースをあらかじめ定めていることである(全長約2km)。また、被験者は60戸から、地元へ依頼して選定をしてもらっている点である。

このように松島らの論文と本研究との間には手法の共通性が高いものの、生業の違いを含め、条件の違いがあり単純な比較はできない。しかしながら、

両者の結果の共通点、とりわけ宗教設備・聖性に関する成果の共通性は、伝統的な地域の文化とその景観の扱いに大きな示唆を与えるように思われる(表-15)。

松島らの論文で、地域住民(新旧とも)に好ましいものとして最も多く撮影・指摘された対象は「宗教構造物」であり、来訪者と有意な差が見られた。とくにその理由として歴史的な「背景」と信仰すなわち「聖性」が住民に特化した。この点が本研究と同じである。対象地域・生業の違いを超えて、地域住民にとって宗教構造物が、景観表象として重要であることは、特筆すべきと考えられる。

また松島らによれば、生業の基盤である「水田・畑」が旧来の住民に最も好まれていないのに、来訪者と新住民には否定的な指摘がほとんどない($p < 0.05$)。「水田・畑」は旧来の住民に好まれる景観の2位でもあり、両義的である。また新住民に好まれる景観の2位、来訪者の3位と、上位に位置する。このように、水田や畑といった生活基盤については、地元へ古くから住む人々は、来訪者や新住民と異なり、アンビバレントな認識をもつことがわかる。また来訪者や新住民は水田と畑の評価の根拠を視覚的な美醜、新旧住民は農業の実際など背景要因を挙げている。さらに来訪者では「近代的沿道構造物」が好まれない景観の筆頭である一方、旧来の住民にはほとんど指摘がない($p < 0.05$)。このように旧来の住民には評価の深さと広がりがある。本研究の成果にみられた、即物性ではなく陶業成立の背景要因に注目する、古くからの職人らの心性に通ずるものがある。伝統的な生業のいかんを問わずその基盤を景観表象として扱うときに、このような心性にとくに配慮することが重要と考えられる。

また松島らによれば、「水路」が旧来の住民に3番目に好まれていない。その理由は旧来の住民が「過去のより良い状態を知っているから」とされている。山村景観の骨格を形成する水の路のあり方は、本研究の被験者においても課題視されている。あわせて重点的に取り組むべきと考えられる。

地元住民が来訪者と違って、日常の生活基盤の景観を必ずしも審美的に捉えない傾向にあることが、松島らの研究と本研究で共通に確認された。伝統的な生業・生活基盤の表象は、美醜とは別の評価軸で扱うべきことが示唆される。一方、生活基盤に関するこの傾向に対しては、来訪者による景観表象の新たな発見・価値づけの意義がありうる。松島らの来訪者が注目する「昆虫・小動物」、本研究の来訪者が注目する「薪」は、そのような可能性のある景観表象と言えるであろう。

松島らの研究は、本研究と同様に、地域文化の担い手に、直接景観表象を撮影により表現してもらっており、その個別の映像は実存的景観の表象と言える。旧住民に頻繁に確認された、聖性、生産基盤の両義性、生活・生業の背景、および水路の課題性は、本研究でも同様に確認された意識である。外部からの来訪者の思い込みや印象ではなく「条件の人間の普遍性」¹¹⁾に基づき、対象の違いを超えて、相互主体性、間主観的な世界が表れ出たものと考えられる^{[1][3]}。

6. 結論

本論文は窯業の里の文化的景観の表象とその評価を、実存的景観の把握に適した手法・手順である、写真投影法により追究した。[I] その主対象と評価意識を、被験者属性に配慮して分析し、属性による相違の原因・理由と応用の可能性を考察した。また、[II] 農業を生業とする里山での他の研究に照らして、得られた結果の意義をより多角的・根底的に吟味した。[I] のおもな成果を示せば、以下のようになる。

- 1) 窯元とその家族は、移動・誘導、自然および聖性に関する景観表象、来訪者は作陶、その場所および居住に関する表象に、より注目する。
- 2) 地元の若い世代あるいは新しい住民は、景観表象の志向が即物的である一方、年長の世代あるいは古くからの住民は、陶芸成立の背景・要因への関心が高い。
- 3) 小石原皿山の新しい住民あるいは外部出身の住民は、小石原皿山の景観表象に、より肯定的な評価をする傾向がある。
- 4) 移動・誘導に関する景観表象であるサインは、古くからの住民に、より強く注目され、また現状に課題があるものと認識されている。
- 5) 陶芸に本質的な作業様相とその製品は、窯元とその家族による評価が峻厳とならない。
- 6) 陶芸の里の骨格である山川の現状に課題があると地元では認識されている。
- 7) 来訪者は、窯元とその家族と比べると、薪への関心と評価が高い。

以上のような属性間の違いによる景観表象とその評価の相違は、その扱いのための合意形成の困難を暗示する。一方、[II] の成果として、a) 伝統的生業の違いを超えて、地域に根差す景観表象としての、宗教設備と山水の普遍的な重要さが確認された。まずはこれらの価値の活用を追究することが、文化的

景観地の保全のあり方、アプローチの要件ではなかろうか。そのうえで、b) 地域固有の伝統的景観表象の維持と新しい要素（薪積みなど）の活用に取り組むのが、適切なあり方・手順であろう。

文化的景観の表象を扱うために写真投影法を適用することで、潜在化した日常性の様相を属性の違いとともに捉えることができた。写真投影法は、生活・生業を営む人々の実存的な景観表象を直接把握できる方法である。今後この方法に基づき、実存的景観の相互主体性を探る多様な対象の研究を蓄積し、比較検討することで、域外の人間の価値観や思い込みではなく、確実にその根底・根源的本質に迫ることができるだろう。そのような根底はまた、いわゆる場所論の根底である。これについては文献 85) で「述語的景観」として、その理論面を論じた。本研究の実存的景観との関係の検討が、今後の課題の一つである。さらに今後は、小石原をルーツにもち、より固く伝統を維持し続けている、小鹿田焼の里において同様の調査を実施して、両地域の比較を行う予定である。

謝辞：本研究の遂行にあたり、福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区の窯元とその家族の皆さんに、全面的な協力をしていただいた。ここに深く感謝する次第である。調査結果の整理にあたり、とくに故豊岡広平氏（平成 26 年 3 月九州産業大学卒業）の協力を得た。心より感謝するとともに、本論文を広平君の霊前にささげたい。本研究は文部科学省私立大学戦略的研究基盤支援事業「北部九州の窯業に着目した文化的景観の形成と保全に関する研究（研究代表者：山下三平）」（No. S1203007）の助成を受けて実施された。併せて謝意を表する。

付録 [1]

本研究の「実存的景観」は、J. P. サルトルのいう実存主義に基づく概念である。彼はその著「実存主義とは何か」¹¹⁾において、「この言葉（実存主義）を使う大部分の人は、これに正当な定義をくだそうとなると手も足も出ない。この言葉はいま流行となつて、あの音楽家は、あの画家は実存主義だなどと人は好んでいいふらすからである」（同書 p. 12. 括弧内筆者）と非難する。一方、彼の実存主義は「実存は本質に先立つ」（同書 p. 13）との主張によって他と峻別され、実存とそれに基づく創造的主体性が人間存在にとって不可避的な、「普遍的条件」（p. 52）であることを示す。こうして、「書物やペーパーナイフ」などの人工の生産物におけるような、人による生産計

画を本質の一つとし、「生産が実存に先立つ」,「技術的世界観」と明確に区別している (p. 14).

ここで彼のいう実存 (existence) とは, 彼自身の存在の事実, まったく偶発的・個別的な事実存在, その都度, 一回限りの事実として与えられる存在そのものというべきものである. 彼はその主著である「存在と無 (第一分冊)」¹²⁾において, 彼自身の事実存在を「即自存在」と呼んでいる (同書 pp. 48-57). そして人間存在においては, 客体的で単純な, 有限無相 (かたちのない) の事実存在の契機である即自存在に基づき, そこに湧出する主体的な意識存在・自由の契機を「対自存在」と呼んで, 両者における不可同・不可分の区別と関係を明示している (同書 pp. 205-370).

対自存在は, しかしながら「厳密に個人的な主体性ではない」(「実存主義とは何か」, p. 51). デカルト的コギト (われ思う, ゆえにわれあり) において自己自身を直接に捉え得た彼は, さらにこれが「他者の面前でわれわれ自身を捉える」ことである事実を見逃さない (同書 p. 51).

対象認識の内容の真偽ではなく対象を認識することそのものが存在と不可分であることを, 自己自身において鮮明に把握することを, R. デカルトとともに彼の哲学の出発点とし, これを「絶対的真理」(同書 p. 50) と喝破したサルトルは, さらに「デカルトの哲学とは反対に」(p. 51), 「他者は, 私が自分にかんしてもつ認識に不可欠であるとともに, 私の存在にとっても不可欠である. 私の内奥の発見は同時に他者を, 私の面前に置かれた一つの自由, 私に同調しまた反対してしか考えずまた意志しない一つの自由として私に発見させる. こうしてわれわれは, ただちに相互主体性とわれわれの呼ぶ一つの世界を発見する」(p. 52) と, 主体性の展開過程を明らかにする. そうしてこのような「世界」を, 本研究では「実存的景観」と呼ぶのである. ただしその場合, 自他の認識対象には, 環界のすべての事物が含まれることを見逃してはならない. それらもまた, 単純な事実存在とそれ自身の本質を普遍的な条件として存在し, そうしてこれらが各々の人間存在の条件・限界となるからである (「世界における人間の基本的状況を素描する先験的な限界の全体」(p. 53)).

付録 [2]

「動的平衡」は物質交換の平衡状態を表す表現である. 河川工学では河水の掃流力により河床物質の移動が起こっても, 浸食と堆積が釣り合って, 結果として河床の変動を生じない状態を動的平衡と呼ん

で, これをもたらし縦断勾配を重視する⁸⁶⁾. このような単純な物質交換を超え, 分解と合成を伴う複雑な生命現象の本質としての動的平衡を明らかにしたのが, アメリカの生化学者, ルドルフ・シェーンハイマー (1898-1941) である (「動的平衡」¹³⁾, pp. 231-233).

彼は生体に食べ物として取り入れられた分子が, 非常に短時間にその構成成分となり, またすぐに排出される, このような流れとその平衡が生きていることであるという生命観を示した. 分子生物学者の福岡伸一は, シェーンハイマーのこの業績を, 分子レベルの解像度を保ちつつ循環的生命観を明示し機械論的唯物論/生命観を転回させた点で, 「二十世紀最大の科学的発見」と称揚する (同書 p. 233).

福岡は動的平衡の持続可能性について, 次のように述べている: 「サステナブルなものは, 一見, 不変のように見えて, 実は常に動きながら平衡を保ち, かつわずかながら変化し続けている. その軌跡と運動のあり方を, ずっと後になって『進化』と呼べることに, 私たちは気づくのだ」(p. 233). このような持続と進化の視座と, 適切な方法・手順による表象の把握が, 伝統と変容の調和を課題とする, 生きた景観, 有機的に進化し, 継続する景観 (organically evolved, continuing landscape)⁸⁷⁾としての文化的景観を扱いこれを支援するためには, 不可欠と思われる.

付録 [3]

相互主体性 (上記[1]参照) としての実存的景観を把握するには, まず第一に, 個別の主体の認識から出発し, そして第二に, この世界を共有する人々に見られる, 間主観的な, 共通の表象を捉える——この順序を, 過たず, 厳密に踏襲しなければならない (「実存は本質に先立つ」のだから). そこで本研究では文化的景観の表象を, まず個別の住民に写真映像により自由に表現してもらい, つぎにその属性を踏まえて集合的に把握する, 「写真投影法」を採用するのである (「2. 方法」参照).

参考文献

- 1) 中村良夫: 環境はいかにして景観になるか? —この中間的なもの—, 2005 年度九州産業大学大学院学術フロンティア景観研究センターシンポジウム, 基調講演・記録, 人間—環境系の媒体としての景観プロセスに関する学際的研究・平成 17 年度研究成果報告書, pp. 155-174, 九州産業大学景観研究センター, 2006.
- 2) 篠原修 (土木学会編): 土木景観計画, 新体系土木工学, Vol. 59, pp. 28-35, 技報堂出版, 1982.

- 3) K. リンチ(丹下健三, 富田玲子訳): 都市のイメージ, 岩波書店, 1960.
- 4) J. アプトン(菅野弘久訳): 風景の経験—景観の美について, 法政大学出版局, 2005.
- 5) 樋口忠彦: 景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間, pp. 83-159, 技報堂出版, 1975.
- 6) J.v. ユクスキユル, G. クリサート(日高敏隆, 羽田節子訳): 生物から見た世界, 岩波文庫, 2005.
- 7) V.v. ヴァイツゼッカー(木村敏, 濱中淑彦訳): ゲシュタルトクライス—知覚と運動の人間学, みすず書房, 1975.
- 8) J.J. ギブソン(古橋敬, 古橋愛子, 辻敬一郎, 村瀬旻): 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る, サイエンス社, 1985.
- 9) 中村良夫: 風景学・実践篇—風景を目ききする, pp. 18-21, 中公新書, 2001.
- 10) M.G. ターナー, R.H. ガードナー, R.V. オニール(中越信和, 原慶太郎監訳): 景観生態学—生態学からの新しい景観理論とその応用, pp. 16-20, 文一総合出版, 2004.
- 11) J.P. サルトル(伊吹武彦訳): 実存主義とは何か—実存主義はヒューマニズムである, 人文書院, 1955.
- 12) J.P. サルトル(松浪信三郎訳): 存在と無—現象学的存在論の試み, 人文書院, 1956.
- 13) 福岡伸一: 動的平衡—生命はなぜそこに宿るのか, 木楽舎, 2009.
- 14) A. ベルク(三宅京子訳): 風土としての地球, 筑摩書房, 1994.
- 15) 前掲書 9), p. 37.
- 16) 山口知恵, 松本将一郎, 西山徳明: 小鹿田焼の里皿山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 74, No. 644, pp. 2215-2222, 2009.
- 17) 丸谷耕太, 土肥真人, 杉田早苗: 大館曲げわっぱにみる伝統工芸と文化的景観に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp. 411-414, 2012.
- 18) 丸谷耕太, 山下三平, 内山忠, 小川勇樹: 小石原焼の里における作陶に関わる文化的景観の変容に関する研究, 都市計画学会論文集, Vol. 49, No. 1, pp. 83-92, 2014.
- 19) 相田明: 岐阜県恵那市坂折棚田における文化的景観の保全活動史, ランドスケープ研究, Vol. 74, No. 5, pp. 409-4714, 2011.
- 20) 天満類子, 菊池成朋: 隈上川流域の棚田景観と水利システム—新川・田竈地区の山村景観保全に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 674, pp. 805-811, 2012.
- 21) 菊池淑人: 「世界遺産」の棚田をめぐる国際的・国内的保護の変遷—フィリピン・イフガオの棚田と伝統的文化空間の保護に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 679, pp. 2265-2270, 2012.
- 22) 天満類子, 菊池成朋: 山村集落における水系システムと屋敷立地—新川・田竈地区の山村景観保全に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 78, No. 690, pp. 1793-1798, 2013.
- 23) 横関隆登, 小野良平, 伊東弘, 下村彰男: 新潟県十日町市松之山地区にみる棚田景観地の景観構造に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 76, No. 5, pp. 583-586, 2013.
- 24) 井原緑: 瀬戸内海地域における「花の景観」づくりの文化的価値に関する史的考察, ランドスケープ研究, Vol. 71, No. 5, pp. 483-486, 2008.
- 25) 奥敬一, 深町加津枝, 三好岩生, 堀内美緒: 大井川中流域の茶園卓越景観における日中の来訪者による景観認識比較, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, pp. 657-660, 2009.
- 26) 安楽あてね, 後藤春彦, 佐藤宏亮: 集落域での耕作範囲の縮減過程における文化的景観のマネジメントに関する研究—果樹産地である愛媛県明浜町狩浜地区を対象として, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 75, No. 655, pp. 2147-2156, 2010.
- 27) 木村真也, 村上修一: 中山間地域における沿道の茶園景観の特徴に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp. 661-666, 2012.
- 28) 島海基樹, 斎藤英俊, 平賀あまな: フランスに於けるワイン用葡萄畑の景観保全に関する研究—一般的実態の整理とサン・テミリオン管轄区の事例分析, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 78, No. 685, pp. 643-652, 2013.
- 29) 住吉徹, 包清博之: 柳川市の水郷景観保全のための計画区域に関する基礎的研究, ランドスケープ研究, Vol. 70, No. 5, pp. 601-604, 2007.
- 30) 豊島久乃, 斎藤英俊: 水環境への適応とその持続的活用形態からみた山村集落の文化的景観評価—岐阜県大野郡白川村荻町合掌造り集落の例, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 74, No. 642, pp. 1905-1910, 2009.
- 31) 牧寛, 石川幹子: 旧三田用水が形成した文化的景観の歴史的変遷に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 45, No. 3, pp. 397-402, 2010.
- 32) 古賀由美子, 田中尚人, 永村景子, 本田泰寛: 通潤用水の維持管理の変遷とその実態の明示, 土木史研究論文集, Vol. 29, pp. 49-58, 2010.
- 33) 沢一馬, 山口敬太, 久保田善明, 川崎雅史: 水郷集落における文化的景観の持続性—伊庭における水路網の復元と水利用の変容, 土木学会論文集 D1, Vol. 69, No. 1, pp. 42-53, 2013.

- 34) 藤代直希, 松下幸司: 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」における文化的景観と林業—熊野古道・中辺路ルート事例に, 森林研究, Vol. 78, pp. 1-10, 2012.
- 35) 山口敬太: 近代における奈良・山辺の道の形成とその背景, ランドスケープ研究 (オンライン論文集), Vol. 6, pp. 25-32, 2013.
- 36) 氏家清和, 垣内恵美子, 奥山忠裕: 文化的景観の経済波及効果—広島県宮島における観光客調査, 都市計画論文集, Vol. 41, No. 2, pp. 49-56, 2006.
- 37) ティティン・ファティマ, 神吉紀世子: インドネシア・ボロブドゥール区レベルにおける文化的景観保全イニシアチブのための市民組織間関係に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 44, No. 3, pp. 205-210, 2009.
- 38) ティンティン・ファティマ, 神吉紀世子: インドネシア・ボロブドゥール区におけるルール・ツーリズム・イニシアチブの評価—文化的景観を保全に向けたルール・ツーリズム活動に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 673, pp. 563-572, 2012.
- 39) 宮本万理子, 横張真, 保科宇秀: 牧の払い下げ形式にもとづく下総台地における景観の特徴解明, ランドスケープ研究, Vol. 74, No. 5, pp. 673-678, 2011.
- 40) 宮本万理子, 横張真, 渡辺貴史: 土地履歴の解釈にもとづく文化財としての文化的景観の捉え方の検討, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp. 597-600, 2012.
- 41) 宮脇勝, 深谷正則: 千葉県域の利根川水系における水塚及び屋敷林の文化的景観に関する研究—栄町, 本埜村, 印西市, 我孫子市, 柏市, 白井市の水塚と屋敷林のタイプ分類, 保存状態, 所有者意識, 都市計画論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 673-678, 2008.
- 42) 石川幹子, 大和広明, 大澤啓志: 東北地方太平洋沖地震津波による海岸林の被災分析と文化的景観の特質に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 48, No. 3, pp. 1005-1010, 2013.
- 43) 東口涼, 今西純一, 飯田義彦, 森本幸裕: 奈良県吉野山の土地利用の変遷と旅行雑誌から見た景観受容の変化, ランドスケープ研究, Vol. 76, No. 5, pp. 601-604, 2013.
- 44) 大森洋子, 高口愛, 西山徳明: 文化的景観条例による町並み保存と景観形成の手法—福岡県八女市における事例報告, 都市計画論文集, Vol. 38, No. 3, pp. 565-570, 2003.
- 45) 岩本博幸, 垣内恵美子, 氏家清和: CVMを用いた伝統的建造物群保存地区の文化的景観の経済評価—高山市における事例研究, 都市計画論文集, Vol. 41, No. 2, pp. 18-24, 2006.
- 46) 飯田晶子, 石川幹子: 幕末・明治期の横浜旧居留地・外国人遊歩道における文化的景観に関する研究—「横浜写真」・「横浜絵葉書」を用いた景観分析を通して, 都市計画論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 541-546, 2008.
- 47) マテオ・ダリオ・パオルッチ, 宮脇勝: 群馬県山村集落六合赤松地区における文化的景観に関する研究—歴史的な絵図, 地籍図, 土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史の変遷分析, 都市計画論文集, Vol. 40, No. 3, pp. 817-822, 2005.
- 48) イシザワ・マヤ: アンデスの文化的景観の保存と再生に関する研究—オヤンタイタンボを事例として, 都市計画論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 523-528, 2008.
- 49) イシザワ・マヤ, 石川幹子, 福井弘道: アンデス農村地域の文化的景観の変容—ペルー共和国インカの聖なる谷のチンチェロ村を事例として, 都市計画論文集, Vol. 44, No. 3, pp. 427-432, 2009.
- 50) 南里美緒, 横張真, 落合基継: 近江八幡の水郷景観におけるヨシ原の変遷とその文化的景観としての保全策, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, pp. 731-734, 2009.
- 51) 飯田晶子, 野口翠, 大澤啓志, 石川幹子: ミクロネシア島嶼パラオ共和国における集落の文化的景観に関する研究—バベルダオブ島アイライ集落を事例に, 都市計画論文集, Vol. 45, No. 3, pp. 97-102, 2010.
- 52) 石鼎, 石川幹子, 片桐由希子: 1910年代以降の観光事業が中国杭州西湖風景名勝区の文化的景観に与えた影響に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 46, No. 3, pp. 619-624, 2011.
- 53) 石鼎, 石川幹子: 中国四川省都江堰市のグリーンベルトにおける農村地域の文化的景観に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 47, No. 3, pp. 1009-1014, 2012.
- 54) 本多秀行, 荒井歩: 石川県輪島市大沢の生活地名と空間構造の関係, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp. 605-608, 2012.
- 55) 森朋子: 大字単位から見た五箇山の文化的景観の深層構造—世界遺産相倉・菅沼集落と周辺山村集落の文化的景観の保全に関する研究, 都市計画論文集, Vol. 48, No. 3, pp. 579-584, 2013.
- 56) 山口知恵, 大森洋子, 西山徳明: 鹿児島県奄美市赤木名における生業と空間構成, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 78, No. 689, pp. 1579-1587, 2013.
- 57) 松島洋介, 奥敬一, 深町加津枝, 堀内美緒, 森本幸裕: 琵琶湖西岸の里山地域における身元住民と移入住民の景観認識の比較, ランドスケープ研究, Vol. 71, No. 5, pp. 741-746, 2008.
- 58) 黒田乃生: 日本の世界文化遺産における森林の現状に関する考察, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, pp. 645-650, 2009.
- 59) 恵谷浩子: 四万十川流域における広域の文化的景観の捉え方, 流域圏学会誌, Vol. 1, No. 1, pp. 13-18, 2012.
- 60) 今村洋一, 大島夕起, 岡崎篤行: 重要文化的景観制度

- の運用実態と展望—全国の事例を俯瞰して、土地総合研究, pp. 1-10, 2011.
- 61) 渡辺綱男, 佐々木真二郎, 四戸秀和, 下村彰男: わが国における国立公園の資源性とその取扱いの変遷に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp. 483-488, 2012.
 - 62) 小石原村誌編集委員会: 小石原村誌, 小石原村, 2001.
 - 63) 濱田琢司: 産地変容と「伝統」の自覚—福岡県小石原窯業と民芸運動との接触を事例に, 人文地理, Vol. 50, No. 6, pp. 606-621, 1998.
 - 64) 野田正彰: 漂白される子供たち, 情報センター出版局, 1988.
 - 65) 山下三平, 坂本紘二, 平野宗夫: 子供の目に映った河川環境とその評価に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol. 10, pp. 271-278, 1992.
 - 66) 山下三平: 写真投影法による河川景観の構造に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol. 12, pp. 335-342, 1995.
 - 67) 山下三平: 写真投影法による河川景観の時間的パースペクティブに関する研究, 環境システム研究, Vol. 23, pp. 567-574, 1995.
 - 68) 山下三平: 河川景観の構図と河川の規模との関係について, 土木計画学研究・論文集, Vol. 13, pp. 485-492, 1996.
 - 69) Yamashita, S.: Perception and evaluation of water in landscape: use of Photo-Projective Method to compare child and adult residents' perceptions of a Japanese river environment, *Landscape and Urban Planning*, Vol. 62, No. 1, pp. 3-17, 2002.
 - 70) 中村彰吾, 小林昌毅, 高橋邦夫, 萩原良巳: 写真投影法による都市域河川の水辺デザイン情報抽出, ランドスケープ研究, Vol. 64, No. 5, pp. 821-824, 2001.
 - 71) 久隆浩, 鳴海邦碩: 子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 27, pp. 715-720, 1992.
 - 72) 上山輝, 土肥博至: 写真投影法を用いた景観評価の基礎的構造に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 31, pp. 595-600, 1996.
 - 73) 伊藤弘: 新宿御苑における好まれる景観と印象に残るものの関係, ランドスケープ研究, Vol. 68, No. 5, pp. 463-466, 2005.
 - 74) 奥敬一, 深町加津枝: 写真投影法による箕面国定公園利用者の風景認識に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 58, No. 5, pp. 173-176, 1995.
 - 75) 奥敬一, 深町加津枝: 林内トレイルにおいて体験された景観型と利用形態の関係に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 63, No. 5, pp. 587-592, 2000.
 - 76) 栗原雅博, 古谷勝則, 油井正昭, 多田充, 赤坂信: 霧ヶ峰における自然観察路から見る二次草原の植生とその景観評価に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 64, No. 5, pp. 735-740, 2001.
 - 77) 上田裕文, 小野良平, 下村彰男: 森林のイメージ形成に与える個人背景と既存イメージ, ランドスケープ研究, Vol. 65, No. 5, pp. 685-688, 2002.
 - 78) 長瀬安弘, 浅野智子: 写真投影法による森林ボランティアと大学生の森林における空間認知に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 67, No. 5, pp. 615-618, 2004.
 - 79) 青野幸子, 加我宏之, 下村泰彦, 増田昇: 泉北丘陵端部の農村地域における地形特性から捉えた居住者が好む風景の魅力の解明, ランドスケープ研究, Vol. 68, No. 5, pp. 753-756, 2005.
 - 80) 奥敬一, 深町加津枝, 三好岩生, 堀内美緒: 大井川中流域の茶園卓越景観における日中の来訪者による景観認識比較, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, pp. 657-660, 2009.
 - 81) Chenoweth, R.: Visitor Employed Photography: A Potential Tool for Landscape Architecture, *Landscape Journal*, Vol. 3, pp. 136-147, 1984.
 - 82) 小鹿田焼の里文化的景観保存計画策定委員会: 小鹿田焼の里文化的景観保存計画(第三版), 日田市教育庁文化財保護課, 2010.
 - 83) 東峰村ツーリズム協会: 東峰見聞録, <http://toho.main.jp/teshigotoichi.html>
 - 84) 東峰ムラガールズ: アンテナショップ With +, <http://withplus.jimdo.com/>
 - 85) 山下三平: 述語的景観と場所の概念, 九州産業大学工学部研究報告, Vol. 50, pp. 13-22, 2014.
 - 86) 篠原謹爾: 河川工学, p. 41, 共立出版, 1975.
 - 87) UNESCO Intergovernmental Committee for the Protection of the World Cultural and Natural Heritage: *Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention*, UNESCO World Heritage Centre, p. 72, 2015.

(2015. 12. 28 受付)

LANDSCAPE REPRESENTATION AND EVALUATION OF A POTTERY VILLAGE
OF JAPAN:
AN EXISTENTIAL APPROACH TO A CULTURAL LANDSCAPE

Sampei YAMASHITA, Kota MARUYA, Tadashi UCHIYAMA and Toru KURITA

Sustaining traditional and communal lifestyle forms phases of a cultural, livable landscape. It is necessary to explore as much as possible the existential and concrete aspect of life of local people when addressing the landscape. This study is to grasp and evaluate landscape representations of a Japanese pottery village called “Koishiwara”, which was established in the 17th century and flourished with the folk-art movement in the middle of the 20th century. Photo-Projective Method is applied to comprehend the psyches of craftsmen/ their family members as well as tourists to the village. The representation/ evaluation are examined by comparing them with those obtained in a traditional farming village of Japan. It is found that: 1) seniors tend to be unconscious of the infrastructure for pottery but conscious of factors for pottery; 2) the sacred, mountains and stream water are important as cultural landscape representations beyond the boundary of tradition; 3) the stack of firewood has a potential for attracting tourists as a unique representation of a pottery village.